

〔論文〕

## 芥川龍之介『トロッコ』の世界

丹羽 章\*

### 序

『トロッコ』は大正11年3月1日発行の雑誌『太陽』に発表された。この時期以降、芥川は健康と創作力の衰えに苦しみ、いわゆる「保吉物」などの自伝的作品を発表するなど、作風も大きく変化する時期にあたっている。芥川の作家としての転機にあたる作品である。ただ、本作については同時代から評価が高く、「日本独特の、作文的短編、トロッコといふ物象にまつはる記憶を描いて、それを徐々に人生の象徴にもつてゆき、最後に現在の心境に仮託させる、といふ型の短編」の「系列の中ではもっとも佳良なものの一つ」(三島由紀夫<sup>(1)</sup>)という評価が定着しているといつてよい。

本作は塵勞に疲れた、おそらく三十歳前後の青年が、八歳の頃のある経験を、なぜか思い出す、という設定になっている。したがって彼がその記憶をたびたび想起せざるにいられない理由、その記憶が現在の彼にとって持つ意味とは何なのかが問題となる。

記憶の内容は概ね三つの部分に分かれている。最初に八歳の良平が紹介される。彼はある憧れ、欲望を持つ少年である。それは「トロッコに乗りたい」「土工になりたい」という表現をとっている。ただしそれは「大人」による強烈な禁止に会い、挫折する。次に、その欲望が実現される。のぞみはかなえられ、良平は未知の世界に踏み込む。彼はそこであこがれていた快感を経験し、欲望は充足され

---

\* Akira NIWA 本学文学部教授 (人文学科)

る。ところがその快感をもたらす行為はやがて彼にとって苦役となり、にもかかわらずそれを止めることができないという状況に陥ってしまう。最後に、欲望が充足された結果もたらされた不安と恐怖の経験と、もといいた世界への帰還が語られる。したがって我々は、八歳の少年の抱いていた欲望の性格と、それを充足させるという行為が不安と恐怖という結果を招いたという経験が八歳の少年にとっていかなる意味を持つものであったかを、まず明らかにしなければならない。その上でそのような過去の経験が、現在の良平にとっていかなる意味をもつ記憶として想起されているのかを考察しなければならないだろう。

西垣勤氏の指摘のように、従来の『トロッコ』論は、「成人した良平が、少年時のトロッコとの体験を回想する」部分を「切り捨てた範囲にこそ、この作品の優れた内容がある」という論と、「最後の良平青年の感懐をそのまま芥川の作家としてのそれと結び付ける」論との二極の間で論じられてきたということが出来る<sup>(2)</sup>。下澤勝井氏は前者の立場から、『トロッコ』の主題を「子供らしい懼れやおのきを叙したもの<sup>(3)</sup>」とする。また下澤氏はこの作品においては子供が大人に対して常に被害者の立場にたっていることを強調し、回想部の最後、父母らに囲まれた良平が両親などの問いに答えず泣き立てた部分について、良平の大人への反抗、抗議を読み取っているところに特色がある。

作品の構成に関して言えば、平岡敏夫氏は「背の高い土工」による叱責の場面までを前半とし、土工の黄色い麦わら帽のイメージについて考察しているが、この土工については「怒鳴ることで追い払う固さ」とも「子供への気遣い」とも読みうるという指摘にとどまっている。ただ作品の後半に登場する若い二人の土工について「若さ」が強調されていることを指摘し、二人の「若さゆえの無自覚、無分別」を指摘しているところが興味深い<sup>(4)</sup>。前掲の西垣氏も、「背の高い土工による叱責」の場面においてこの作品を前半、後半に二分している。また西垣氏は良平の憧れを「外の世界」への憧れとみなし、少年は非常な恐怖の経験の後、「母を母体とする血縁共同体」に戻り、安息を得たと指摘している。「外の世界」という表現はあいまいだが、良平のトロッコへの憧れが、本質的に何への憧れであり、欲望であるかについての考察を行っているところに重要な意義があると考えられる。関口安義氏は『トロッコ』の構成を、1、トロッコへの憧れ。2、憧れの高まり。3、憧れの実現から不安と恐れへ。4、回想部。の四段構成とし、

「成人した良平と少年良平をつなぐものは何か」を問う。そして回想部分の灰色の色調が成人の良平の「塵労に疲れた姿」に重なっているとし、「若い土工に裏切られて必死に走った道がそのまま彼の現在の人生の道につながっている<sup>(5)</sup>」と指摘している。回想する現在の重要性をふまえた考察であり、本稿の論旨に通じる指摘であるが、関口氏の指摘される「薄暗さ」、「わびしさ」が、人生へのどのような認識の結果であるのか、少年良平が走った道がどのような意味で現在の彼の人生の道につながっているのか、その内実がさらに問われなければならないであろう。また、回想部分の考察においては、諸論の指摘に見えるように、良平の欲望を禁ずるものとしての「背の高い土工」、良平の欲望を無制限に受容する「若い二人の土工」とは何かもそれぞれ問われなければならないだろう。むしろそれは、良平の欲望とは何か、その本質を考察する中で考えられなければならない。

## 1. 良平の欲望

八歳の良平は、トロッコに乗りたい、土工になりたいと憧れる少年として現れる。トロッコに乗ること、土工になることによって、少年のいかなる欲望が充足されるのだろうか。土工への憧れが、成人した男性のたくましい肉体への憧れでもあることは言うまでもあるまい。そして「トロッコに乗る」事が、一気に走り下る爽快な快感への欲望であることも確かであろう。そしてその快感が、土工達、すなわち成人した男性にのみ味わうことを許されたものであることに良平は自覚的である。「トロッコは三人の力がそろろうと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。」この「ひやりとした」という感覚は、トロッコに触れることが、八歳の少年には未だ禁じられた行為であること、己が、触れてはならないものに触れ、タブーを犯そうとしていることにこの少年が自覚的であったということを示している。しかし「二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。」ここで少年は、成人した男性のみに許された快感の一端を経験することになる。良平は「顔にふきつける日の暮れの風を感じながら殆ど有頂天になってしまった。」

しかし、タブーを犯し、禁じられた快樂を味わった事は「大人」による恐ろしい「罰」を招かずにいられない。少年を叱責した土工が「背の高い」土工と設定

されている事は無意味ではないだろう。遙かな高み、天から落ちてくるような怒声は、「禁じる者」「裁く者」の圧倒的な高さ、強さを少年に印象づけたであろう。そしてそれに対する幼い己の卑小さ、無力を骨身にしみるほどに痛感させたであろう。それは「それ切り良平は使の歸りに、人気のない工場のトロッコを見ても、二度と乗ってみようと思ったことはない。」というほどの恐怖を植え付ける。それは少年には未だ許されていない世界に触れる事への、「大人」による恐るべき「裁き」への恐怖である。

以上のように、良平の欲望を「成人した男性の肉体を持ち、成人の男性にしか許されていない喜びを味わうこと」への欲望だとするならば、良平が八歳の少年として設定されていることも偶然ではないかもしれない。この欲望は六歳の弟達には未ださほど強烈には意識されていない。彼らは叱責された後、トロッコにはもはや触れようとはしていないからである。とすれば八歳の良平をのみ捉えて話さないこの抑えがたい欲望を、エディプス的なものとも考えることも可能である。例えば、ひたすら押す（溜め込む）、一気に解放する、快感を得る、という、良平が思う存分味わうことになる欲望充足のパターンは、男性の性的快感のありようを暗示していると思われるからだ。そう考えればあの「背の高い土工」とは「禁じ、裁き、罰するもの」としてのフロイト的な意味での「父なるもの」であり、子供達を捉えたあの過剰なまでの恐怖は去勢恐怖であるということになる。もっとも、そのような解釈に固執する必要はない。大切なことは、西垣勤氏にいわれる「外の世界」とは「大人の世界」として理解することがより適切であり、良平が憧れ、タブーを破ってまで手に入れようとしているものが、「大人の男性にのみ許された喜び」であるという事なのである。八歳の良平は、「子供の世界」を超えて「大人の世界」へと参入することを望んでいるのだ。

## 2. 欲望の充足とその結果

こうして、良平の抱く「禁じられた欲望」の内実が明らかになった。そして、良平は「父」の禁止というタブーを破り、その快樂の世界に侵入する。そこには「若い二人の土工」の存在が介在していた。

この二人の土工について、作者はその「若さ」を強調している。つまり彼等は

「父性」（禁止する者）として良平に働きかける存在ではない。むしろ彼等は「われは中々力があるな」等と良平をおだて、良平を「大人」扱いして見せ、良平の欲望充足をむしろ煽り立て、無制限に許容していく存在、すなわち「促す者」「誘惑者」として機能している。そして結果的にはその事によって、良平を恐怖のどん底に陥れることになるのである。

欲望を完全に充足させることによって人間を地獄に誘うのは、メフィストフェレスの常套手段である。「望みを叶える」ことによって魂を奪うのである。無論、平岡敏夫氏の言われるように、若い土工達の行為は、彼らの若さ故の無思慮、無分別、身勝手の結果でしかなく、彼ら自身には何の悪意もなかったのだろう。しかし常に彼を気遣ってくれる「保護者達」の中で生きてきた幼い良平にとっては、若い二人の土工の無思慮な行為は、全く不可解なものであったに違いない。「良平は一瞬間呆気にとられた。」という表現はそのことをよく表している。

良平にとって、二人の若い土工は、彼がそれまで「子供」として属していた「母を母体とする血縁共同体」（西垣勤）の外部の世界の存在、すなわち良平が初めて関わり合う事になる「大人の世界」の「他者」であったと考えられる。その他者が、若い二人の土工自身の意図とはとりあえず別に、少年にとっては、メフィスト的な悪意を隠し持つかのごとき不可解な存在として経験されたと思われる、そのことが重要なのである。おそらくそれは、八歳の良平が初めてかいま見ることになった、永遠に不可解な存在としての「他者」の姿だったのである。

さて、ともあれ良平は、この二人の土工によって、自らの欲望を存分に満足させることが出来た。しかしその結果彼が経験しなければならなかったことは、望んで始めた事が、そのまま耐え難い重荷となるという現実である。良平の憧れてやまなかった快樂はそのまま苦役となり、しかも「行きつくところまで行きつかなければ」それをやめることができない。「行きつくところ」とは一体どこなのか。迫り来る日没と深まる闇のかなたにそれはある。夜と闇の極まるところ、それはおそらく人生そのものが行きつくところを暗示しているのだろう。

一旦始めてしまったことは、いつまでも続いていく。いかに苦しくとも止めることはできない。望んで始めたことは常に新たな苦役を招く。しかも人は望むことを止めることができない。とすれば、人生とは、一步一步、新たな重荷を自ら背負い込みながら、「行くところまで行きつ」くまで歩み続けることでしかない。

この「地獄よりも地獄的」（『侏儒の言葉』）な、暗鬱な人生のリアリティこそが、この時良平が垣間見なければならなかった、もう一つのものだったのではないだろうか。

しかし、この時の良平は、「行きつくところまで」行くことなく、もといた世界に帰って行く。若い二人の土工は、取り返しがつかなくなる手前で、幼い良平を解放するのである。こうして回想部は、両親、とりわけ母の懷で泣きじゃくることの出来た幼い良平の姿を描いて結ばれる。そこでは確かに、「いくら大声で泣き続けても、足りない」心の傷、たとえ母の懷に飛び込んでも癒されることのない心のしこりが生まれてしまっていることが語られている。しかし同時に、帰って泣くことの出来る場所を持っていた、少年の幸福と安息も語られている。この幸福と安息の印象はいかにも深い。そしてそれが作品末尾の、現在の良平を描く部分で今一度反転するのである。

### 3. 『トロッコ』の主題

作品末尾には、おそらく三十歳前後に達している、回想している現時点の良平が登場する。しがたない校正係として生きるほかない良平の前には「今でもやはりその時のやうに、薄暗い藪や坂のある道が、細細とひとすぢ断続している……」という。中年に達した彼の前に断続している人生の道が、少年良平の走った道の延長線上にあることは言うまでもない。

生活のための日々の労苦は、良平にとって塵労でしかない。しかし塵労に疲れた彼は、それを塵労と感じつつもなお、やめることが出来ない。無論それは、「妻子」の存在があるからである。その妻子という重荷を担っていくために、良平は、彼自身には無意味としか思われぬ苦役を、続ける他はないのである。彼にはその重荷を下ろすことはできない。なぜならその重荷は彼自身が望んで得たものだからである。望みを叶えた結果がその重荷となったのである。そこには当然「性」が介在していたであろう。このとき「女性」という他者は、彼の欲望をかきたて、誘い、充足させ、そしてその結果耐え難い重荷をもたらすものとして機能したであろう。いかなる憧れも、欲望も、人生の重荷と苦役をさらに加えることにしかならない。そして今の良平に出来ることは、今度こそ、「行くところ

ろに行きつ」くまで、「薄暗い藪や坂のある道」をたどることでしかない。成人した良平には、帰って泣くことのできる場所はもはやないのである。

そう考えると、回想部末尾の安息の感動の意味が改めて明らかになるだろう。帰って泣くことの出来る場所があった少年時代への愛惜、それを二度と取り戻すことはできないと言う痛切な認識が、あの感動を、より切実なものにしているのだ。そしてその感動が切実なものであればあるほど、現在の良平の「娑婆苦」の絶望感が深まっていく。この哀惜と絶望の照応が作品の感動の核心を形成している。それが作品『トロッコ』の世界なのである。

## 注

- (1) 三島由紀夫『『手巾』『南京の基督』ほか』(1956年9月)『文芸読本 芥川龍之介』1975年11月 河出書房新社
- (2) 西垣勤「トロッコ」論『実践国語研究』114号 1992年2月
- (3) 下澤勝井「トロッコ」駒尺喜美編『芥川龍之介作品研究』所収 1969年5月1日 八木書店
- (4) 平岡敏夫「トロッコ」『芥川龍之介—叙情の美学—』1982年11月25日 大修館
- (5) 関口安義「灰色の風景 芥川龍之介『トロッコ』論」関口安義編『芥川龍之介作品論集成』第五巻 1997年2月8日 翰林書房